

ハツ場ダムの中止を求める陳述

2005年1月25日 塚越恵子

私は取手市在住の塚越恵子です。本日は3人で陳述いたしますが、私は何故、ハツ場ダムの中止を求めるのかについて、全体的な話をさせていただきます。

ご承知のように昨年9月、同ダムの中止を求め、関連する一都五県（東京、埼玉、千葉、群馬、茨城）の住民が一斉に住民監査請求を行いました。5400人という空前の規模でしたが、ことごとく棄却、却下されたため、今回の訴訟に至った次第です。

私との関わりについて言えば、本県の県会議員をしておりました2001年に、県議会の担当委員会に、同ダムの完成予定を2010年へと延長することを求める議案が提出されたことによります。その折、私は延長ではなく、中止すべきだとただし同議案に反対致しました。しかし、他会派議員は審議を何らせぬまま、これを容認しました。議会がチェック機能を果たさぬことを大変残念に思いました。

そうした折、住民の方々が世論と運動を広げ、中止しようと今回の動きに大いに共感し、私もその一人に加えていただいたわけです。

それではパワーポイントを使って、お話し致します。

ハツ場ダムは利根川の支流、吾妻川に建設予定のものです。50年も前に計画されたもので、利根川の洪水調節と一都五県-首都圏の都市用水の開発を目的とするものです。

私たちが中止を求める理由は次の三つです。

その 一は利水、治水上必要がないということ。

その 二はムダづかい、巨額の負担が強られること。

その 三は環境破壊とともに多大な危険をもたらす恐れがあることです。

一番目の利水についていえば、一都五県では図のように1990年以降確実に利水が減っています。

節水機器の普及などで一人当たりの給水量が少なくなったなどがその大きな理由です。

一方、利根川流域の人口も全国の傾向と同じく、図のように増加率が減り、国の社会保障、人口問題研究所の推計では2015年をピークに人口は減少するとされています。

一人当たりの給水量の減少や人口の減少を考えれば、将来の水道用水は確実に減っていくでしょう。現在すでに必要な水源は確保されています。このように利水面でもハツ場ダムの必要性はまったく失われています。

なお、同ダムの工事の進捗率は事業費ベースで37%（一昨年度）ですが、いまだ本体工事は着工しておりません。完成は順調に行っても2020年以降になるだろうと言われていいます。このことは国とのやり取りの中で「完成が遅れた場合、ダムへの参加が不要になっ

ている事も想定される・・・」と都県側からも心配する声が出されている程です。

完成時に必要がないことがいっそう明らかになるダムをつくって何の意味があるのでしょうか。

では、治水 洪水対策についてはどうでしょうか。

もともとハッ場ダムは戦後直後の1947年に利根川流域に多大な被害をもたらしたカスリーン台風の台風洪水をベースに計画されたものです。国は八斗島（伊勢崎市）という地点に毎秒、22000トンの洪水が流れるということを想定。この洪水対策の一つとして、ハッ場ダムが必要だとするものです。しかし、毎秒22000トンの大洪水は本当に来るのでしょうか。

図の棒グラフで見ればお分かりのようにカスリーン台風はずば抜けて大きい17000トン。それ以降、キティ台風が一万トンを少々超えた以外、現在までの50年間、一万トンを超えた洪水は一度も来ていません。

カスリーン台風が際立って大きい流量であったのは何故でしょうか。

これは上毛新聞の記事ですが戦争中、森林が次々と伐採され、一面、禿山となりそこに大雨が降って未曾有の洪水となったからです。その後、植林が進み、山の保水力は高まっています。ですから、そんな台風が来る確立はきわめて少ないのです。もともと基本高水流量を22000トンとしたのも、これは単なる計算上の数字であり、実質的な裏付けはありません。

ちなみに、国はカスリーン台風の時、ハッ場ダムがもしあったら、どんな治水効果があったかと試算していますが、その効果はゼロです。雨が降る時刻がずれていることに加え、吾妻川上流の雨量が少なかったからです。地形上、台風の雨雲は南から来て、榛名山と赤木山にぶつかって手前に降るため、吾妻川上流のハッ場ダム予定地に降る雨は少ないのです。

以上のように、ハッ場ダムは治水上も役に立たないダムです。

二番目は巨額の税金の負担についてです。

ハッ場ダムの建設費は一昨年、当初予算の2.2倍となり、全国一高い総額4600億円となりました。これに関連する工事費と利息も含めれば、総額8800億にものぼります。それにより、茨城県の負担額は390億円（利息を含む）で、県民一人当たりの負担は一万3千円です。

必要性が失われたダムの建設にこれほど巨額の税金を注ぐことは、地方自治法、地方財政法などからも許されるものではありません。

ダム建設の危険性については、次に浜田さんが陳述されますので、最後に現地、ハッ場の方々の暮らしについて一言述べさせていただきます。

突然降って湧いた同ダム建設計画により現地の方々は50余年間、ダム問題に振り回され、心身ともに大変な苦痛を舐められてこられました。その上、ダム水没予定地として、生活基盤整備がおざなりにされ、生活の不便に加え、とりわけ、地域経済の疲弊は大変なもの

です。

水没予定地である川原湯温泉の最大の観光資源は「関東の耶馬溪」と称される美しい吾妻溪谷です。この自然を失ったのでは、たとえ移転したとしても温泉街の再建は極めて難しいことでしょう。

半世紀以上にもわたって、精神的にも、経済的にもダメージを受けてきた方々に報いる一番の方法は、必要のないダム建設をやめ、現地再建のために支援をすることではないでしょうか。

以上、子孫に巨額な負の遺産を残す同ダム計画を中止するよう求め、私の陳述を終わります。